

# 詩篇 17:34 における *perficere* の 古英語訳について

石 原 覚

## I

以下は、詩篇作者に対する神からの恩恵について述べた Psalterium Romanum の一節である。ここには *perficere* (完成する、…にする) が用いられている。

- (1) qui *perficit* pedes meos tamquam cerui et super excelsa statuit me (PsRom 17:34)<sup>1)</sup>

(彼は我が足を雄鹿の [足] のようにし (完全にし)、私を高いところに置いた。)

ウルガータ (Vulgata) の詩篇において (1) に対応するのが、次の (2) である。

- (2) qui *perfecit* pedes meos tamquam cervorum et super excelsa statuens me (VVLG. psalm. 17, 34)<sup>2)</sup>

(2) では、(1) の “*perficit*,” “*cerui*,” “*statuit*” が、それぞれ “*perfecit*,” “*cervorum*,” “*statuens*” となっていることを除けば、(1) と (2) の間に異同はない。以下の (3) は古ラテン語訳 (Vetus Latina) で (1)(2) の前半に対応する箇所である。

- (3) Qui *perfecit* pedes meos tamquam cerui. (VET. LAT. psalm. 17, 34 (Aug. *ad l.*))<sup>3)</sup>

(3) と (1) の前半との異同は、(1) の “*perficit*” が (3) では、(2) におけるように、 “*perfecit*” となっていることのみである。

次の (4) は、古英語の散文訳詩篇で (1)~(3) に対応する箇所である。ここでは *gedon* (…にする) と、目的語の後ろに補語の *geræde* (用意のできた)<sup>4)</sup>が見出される。

- (4) He *gedyde* mine fet swa *geræde* swa swa heorotum, and me gesette ofer heanesse. (PPs (prose) 17.32)<sup>5)</sup>

(彼は我が足を雄鹿のように整ったものにし、私を高いところに置いた。)

(4) において目的語の後ろに補語を伴う *gedon* は、以下の (5) において目的語の後ろに補語の “*gehyrsume*” (従順な) を伴う *gedon* と同じく、「…にする」の意味を表す。

(5) *EALA þu scippend heofones & eorþan, ... & þa tunglu þu gedest þe gehyrsume, (Bo 3.10.1)<sup>6)</sup>*

(おお、天と地の創造者であるあなた、……あなたは星を自分に従わせる。)

BT<sup>7)</sup>(s.v. *geræde*) は「用意のできた、速い、機敏な、楽な、平明な、単純な」(“*ready, swift, prompt, easy, plain, simple*”) の語義の下に、(4) の前半を、B. Thorpe のテキスト<sup>8)</sup>から、以下のラテン文と共に引用している。

*qui perfecit pedes meos [celerēs] tanquam cervi*

(彼は我が足を雄鹿の [足] のように [速く] した。)

注目されるのは、ここで BT が目的語の後ろに補語の “*celerēs*” (速い) を角括弧に入れて補っていることである。ここにおいて目的語と共に補語を伴う *perficere* は、次の (6) において目的語と共に補語の “*tritiores*” (より熟練した) を伴う *perficere* がそうであるように、「…にする」を意味する。

(6) *Cum autem cotidie faciendo tritiores maus ad aedificandum perfecissent et sollertia ingenia exercendo per consuetudinem ad artes pervenissent, ... (VITR. 2, 1, 6)<sup>9)</sup>*

(しかし日々の労働を通じ、手を建築向きに、より熟練させ、賢明な才能を習慣的に働かせて技能へと到達すれば、……)

従って BT は、(4) において *gedon* のみがラテン語原文の *perficere* に対応する——*geræde* はラテン語原文に対応する語を持たない——と見なしていると言える。<sup>10)</sup>

本稿では、BT によるこの捉え方とは異なる、(4) の *gedon* も *geræde* も共にラテン語原文の *perficere* に由来するという捉え方も可能であることを示す。

## II

A~K の古英語の詩篇行間注解 (Psalter gloss)<sup>11)</sup>のうち、E, F と I を除いた 8 の注解において、(1)(2) または (3) の *perficere* は、次の (7) におけるごとく *gefremman* (…にする) に訳されている。<sup>12)</sup>

(7) *se gefremyde fet mine swa swa heortys & ofyr þa hean gesette me* (PsGIC 17.34)

なお I では (2) の *perficere* は、以下の (8) におけるように *gedon* に訳されている。<sup>13)</sup>

(8) *se gedede l se ðe fulfremed fet mine swaswa heorta & ofor healice l heanyssa gesettende me* (PsGII 17.34)

*gefremman* と *gedon* が共に「…にする」の意味で——目的語の後ろに不可分の要素を伴い——用いられることは、*gefremman* については、次の (9) において見られる目的語と共に“*wlitigne*” (美しい) と“*wundorlicne*” (驚くべき) という補語を伴う例から、また *gedon* については、(4)(5) において見られる例から明らかである。

(9) *He hwæðere eft þone ilcan lichaman swiðe wlitigne and wundorlicne gefremede þurh his þa halgan ærist.* (HomS 22 90)<sup>14)</sup>

(しかし彼は、その同じ体を、彼の聖なる復活により、大変美しく、また驚くべきものとした。)

このように、「…にする」の意味を持つ *gefremman* ないしは *gedon* に訳されることから、(1)~(3) の *perficere* を「…にする」の意味に取ることは可能である。

実際 A. Blaise は (2) の *perficere* を「*facere* と同様、…にする」(“*c. facere, faire, rendre*”)<sup>15)</sup> の語義の下に挙げている。また M. Mlčoch は (2) を “*Qui reddidit pedes meos ut pedes cervorum, et in excelsis locis stare me fecit*”<sup>16)</sup> (彼は我が足を雄鹿の足のようにし、私を高い所に立たせた) と解釈し、J. Ecker は (2) の前半を “*der meine Füße macht wie die der Hirsche*”<sup>17)</sup> (彼は我が足を雄鹿の [足] のようにする) と訳しており、共に問題の *perficere* を Blaise と同様に「…にする」の意味に取っている。

従って、BT が (4) において *gedon* のみがラテン語原文の *perficere* に対応すると見なしているのは妥当であると言える。

### III

ギリシャ語原文、すなわち七十人訳聖書 (LXX) において (1)~(3) に対応する以下の (10) に目を向けると、問題の *perficere* は *καταρτίζειν* (完成する) に由来することがわかる。

(10) ὁ καταρτιζόμενος τοὺς πόδας μου ὡς ἐλάφου καὶ ἐπὶ τὰ ὑψηλὰ ἰστών  
με, (LXX Ps. 17(18).34)<sup>18)</sup>

(彼は我が足を鹿の〔足〕のように完全にし、私を高いところに置く。)

(10)に見られる、神を主語、「我が足」を目的語とし、その後ろに何らかの要素を従えるという表現は、LXXにおいては、次の(11)(12)にも見出される。<sup>19)</sup>これらにおいては(10)の καταρτιζειν に対応する動詞として、それぞれ τιθέναι (…にする)、<sup>20)</sup> τάσσειν (据える、…にする) が用いられている。

(11) τιθεὶς τοὺς πόδας μου ὡς ἐλάφων καὶ ἐπὶ τὰ ὕψη ἰστών με· (LXX 2 Ki. 22.34)

(彼は我が足を鹿の〔足〕のようにし、私を高いところに置く。)

(12) κύριος ὁ θεὸς δύναμις μου καὶ τάξει τοὺς πόδας μου εἰς συντέλειαν·  
ἐπὶ τὰ ὑψηλὰ ἐπιβῆα με . . . (LXX Hb. 3.19)

(神である主は我が力であり、我が足を完全にする(完全に据える)であろう。……彼は私を高いところへ登らせるであろう。)

(11)において τιθέναι は ὡς を、(12)において τάσσειν は εἰς を伴うが、(11)の τιθέναι、(12)の τάσσειν は、それぞれ以下の、(13)における ὡς を伴う τιθέναι の例、(14)における εἰς を伴う τάσσειν の例から明らかのように、どちらも「…にする」の意味を表す——目的語の後ろの部分と不可分の関係にある——と捉えることができる。

(13) Καλῶς εὖ σε ποιήσω καὶ θήσω τὸ σπέρμα σου ὡς τὴν ἄμμον τῆς  
θαλάσσης, ἢ οὐκ ἀριθμηθήσεται ἀπὸ τοῦ πλήθους. (LXX Ge. 32.13)<sup>21)</sup>

(私はお前に良くしてやり、お前の子孫を、多すぎて数えられない海の砂のようにするであろう。)

(14) ἐπ' αὐτὸν ὠρύνοντο λέοντες καὶ ἔδωκαν τὴν φωνὴν αὐτῶν, οἱ ἔταξαν  
τὴν γῆν αὐτοῦ εἰς ἔρημον, (LXX Je. 2.15)<sup>22)</sup>

(獅子は彼に対して咆え、声を上げて、彼の地を荒廃させた。)

なお(12)の εἰς を伴う τάσσειν は、次の古ラテン語訳の(15)において in を伴う ponere (…にする) に対応している。

(15) Dominus Deus fortitudo mea, et ponet pedes meos in consummationem,  
super excelsa imponet me, . . . (VET. LAT. Hab. 3, 19 (Hier. ad l.))<sup>23)</sup>

(神である主は我が力であり、我が足を完全にし、……私を高い所に置くであろう。)

ここにおいて *ponere* は、以下の (16) におけると同様に「…にする」の意味を表し、*in* により導かれる句と不可分の関係にある。

(16) *posuit vineam meam in desertum et ficum meam decorticavit* (VVLG. Ioel 1, 7)<sup>24)</sup>

(それは我が葡萄の木を荒廃させ、我が無花果の木の皮をはいだ。)

よって上記の古ラテン語訳からも、(12) の *τάσσειν* は「…にする」の意味で用いられていると判断できる。

さらに、以下の古ラテン語訳の (17) では、*ponere* が (10) の *καταρτίζειν* に対応している。

(17) *Qui posuit pedes meos sicut cerui, et super excelsa statuit me.* (VET. LAT. psalm. 17, 34 (Verec. in cant. 6, 22))<sup>25)</sup>

(彼は我が足を雄鹿の [足] のようにし、私を高い所に置いた。)

(17) の *ponere* は *sicut* を伴うが、ここにおいて *ponere* が「…にする」の意味を表し、*sicut* により導かれる部分と不可分の関係にあることは、次の (18) におけると同様である。

(18) *pone principes eorum sicut Oreb et Zeb et Zebee et Salmana omnes principes eorum* (VVLG. psalm. 82, 12)<sup>26)</sup>

(彼らの君主たちをオーレーブ、ゼーブ、ゼベーやサルマナのようにし給え、彼らのすべての君主たちを。)

以上のように、(10) に見られるのと類似した表現が見出される (11)(12) において、(10) の *καταρτίζειν* に対応する動詞を「…にする」の意味に取り得ること、また古ラテン語訳において、(10) の *καταρτίζειν* に対応する語として「…にする」の意味の動詞が用いられている例が見出されることは、この *καταρτίζειν* を「…にする」の意味で捉え得ることを示し、よって、その訳語である (1)~(3) の *perficere* を「…にする」の意味に解し得ることがわかる。

#### IV

II と III では、(1)~(3) の *perficere* を「…にする」の意味で——目的語の後ろの部分と不可分の関係にあるものとして——捉え得ることを示したが、*perficere* は次の (19) におけるように「完成する」の意味を表す動詞である。

(19) *ut Apelles Veneris caput et summa pectoris politissima arte perfecit, reliquam partem corporis incohatam reliquit, . . . (CIC. fam. 1, 9, 15)<sup>27)</sup>*

(アペッレースが、ウェヌスの頭と胸の最上部を極めて優美な技で完成させたが、体の残りの部分は未完成のまま残したごとく、……)

では(1)~(3)の *perficere* を「…にする」の意味ではなく、「完成する」の意味で——目的語の後ろの部分から切り離せるものとして——捉えることは可能であろうか。

詩篇行間注解の E と I において、(1) または (2) の *perficere* は、(8) に見られるごとく *fullfremman* (完成する) に訳されている。<sup>28)</sup> *fullfremman* は以下の(20)におけるごとく「完成する」の意味で用いられる動詞である。

(20) *he onsænde þone cniht eft to þam weorce swa gesundne & swa strangne, swa he ær wæs, to þon þæt he sceolde gegearwian & fulfremman þone wah mid þam oþrum broþrum. (GD 2 (C) 11.125.33)<sup>29)</sup>*

(彼は、その少年を、他の修道士たちと壁を整え、仕上げるようにと、元通りに健全で頑丈な状態で、作業に送り返した。)

Augustinus (430没)<sup>30)</sup>は、(3)の引用に続けて、それを解釈するに際し、以下のごとく *perficere* を目的語の後ろの部分から切り離して——目的語の後ろに副詞句を置いて——(3)を言い換えている。

*Qui perfecit amorem meum, ad transcendenda spinosa et umbrosa implicamenta huius saeculi.*

([「彼は我が足を雄鹿の[足]のように完全にした。】彼は、この世の、茨が茂り陰になった混乱を超えるために、我が愛を完全にした。)

Verecundus (552没)は、以下のようにダニエル書3:40からの引用の解釈において、詩篇17:34と16:5を引用している。

*Et perfice subsequentes te. Idipsud perfici non aequali modo aut mensura omnes qui perficiuntur, consistunt. Aliud est enim perfici tantum, aliud sicut ceruus perfici. Dictum est enim: Qui perfecit pedes meos tamquam cerui, et super excelsa statuet me. Vide iam quanta sit mystici latitudo sermonis. Hic simpliciter ait: Perfice subsequentes te. Aliud est: Perfice gressus meos in semitis tuis, ut non moueantur uestigia mea. Et iterum: Qui perfecit pedes meos tamquam cerui. Hic omnibus excellentissime perficitur, quisquis ut ceruus perficitur.<sup>31)</sup>*

(「あなたに従う者たちを完全にし給え。」[ダニエル書3:40] 完全にさ

れる者たちは皆、同様に、また同程度に、完全にされるわけではないというまさにそのことを明らかにする。単に完全にされるものもあれば、雄鹿のように完全にされるものもあるからである。「彼は我が足を雄鹿の [足] のように完全にし、私を高い所に置くであろう」[詩篇 17:34] と言われているからである。神秘的な言葉の大きさが、いかほどかを見よ。ここでは簡潔に「あなたに従う者たちを完全にし給え」と言う。他に「我が歩みをあなたの小道において完全にし給え、我が歩みがよろめかぬように」[詩篇 16:5] がある。再び「彼は我が足を雄鹿の [足] のように完全にした」[についてである]。ここでは、誰であれ雄鹿のように完全にされる者は、あらゆる点で最高に完全にされるのである。)

上記のダニエル書 3:40 の *perficere* は目的語のみを伴い、「完成する」を意味する。<sup>32)</sup> ここで詩篇 17:34 と 16:5 は、共に *perficere* を含む故に解釈に取り入れられており、よって問題の詩篇 17:34 の *perficere* は、ダニエル書 3:40 のそれと同じく、「完成する」の意味で——目的語の後ろの部分から切り離せるものとして——捉えられているとわかる。

Haymo (853 没) は、(2) の *perficere* を次のごとく *perfectum facere* (完全なものにする) に言い換えており、よってこの *perficere* を目的語の後ろの部分から切り離せるものとして捉えている。

... Deus “*perfecit,*” id est *perfectos fecit* “*pedes meos,*[”] id est *affectus meos* “*tanquam cervorum,*” id est *similes cervis.*<sup>33)</sup>

(……神は「我が足を[ ]」、すなわち我が感情を「雄鹿の [足] のように」、すなわち雄鹿に似たものとして「完全にした」、すなわち完全なものにした。)

以上のごとく、(1)(2) の *perficere* が、「完成する」の意味で用いられる *fullfremman* に訳されていること、また Augustinus, Verecundus, Haymo が、いずれも詩篇 17:34 の *perficere* を目的語の後ろの部分から切り離せるものとして捉えていること<sup>34)</sup> は、この *perficere* を「完成する」の意味で捉え得ることを示す。

ちなみに今義博他による翻訳では (3) は「神はわたしの足を鹿の足のようにならしてくださいました」(上点筆者)<sup>35)</sup> と訳されている。

V

Ⅲでは(10)の *καταρτίζειν* を「…にする」の意味で捉え得ることを示したが、*καταρτίζειν* は次の(21)に見られるように、目的語のみを伴い、「完成する」の意味で用いられる動詞である。

(21) Τίς ἔθηκεν ὑμῖν γνώμην τοῦ οἰκοδομήσαι τὸν οἶκον τοῦτον καὶ τὴν χορηγίαν ταύτην *καταρτίσασθαι*; (LXX 2 Es. 5.3)<sup>36)</sup>  
(誰がお前たちに、この家を建て、その調度を仕上げるよう指示を与えたのか。)

ならば(10)の *καταρτίζειν* を「完成する」の意味に解することは可能であろうか。

Euthymius Zigabenus (11~12世紀)は、以下のごとく詩篇17:34の前半の解釈において、副詞句を伴う、*εὐτρεπίζειν* (用意する)の誤記と考えられる語と *τελειοῦν* (完成する)により原文を言い換えており、故に問題の *καταρτίζειν* を目的語の後ろの部分から切り離せるものとして捉えている。

*Καταρτιζόμενος τοὺς πόδας μου, ὡσεὶ ἐλάφου. Ἐντρεπίζων [Ἐυτρεπίζων], τελειῶν εἰς δρόμον ἐν καιρῷ φυγῆς.*<sup>37)</sup>  
(「彼は我が足を鹿の[足]のように完全にした。」逃亡の好機に走るように、彼は整え、仕上げる。)

Ⅲでは(12)の *τάσσειν* を「…にする」の意味で捉え得ることを示したが、*τάσσειν* は以下の(22)におけるごとく「据える」を意味する動詞である。

(22) καὶ ἔταξεν τὰ χερουβιμ καὶ τὴν φλογίνην ῥομφαίαν τὴν στρεφομένην φυλάσσειν τὴν ὁδὸν τοῦ ξύλου τῆς ζωῆς. (LXX Ge. 3.24)<sup>38)</sup>  
(〔主は〕命の木の道を守るために、ケルビムと、回る燃える剣を配置した。)

では(12)の *τάσσειν* を「据える」の意味に取ることは可能であろうか。

(12)の *τάσσειν* は、以下の古ラテン語訳の(23)では *constituere* (堅固にする)により表されている。

(23) Dominus Deus, uirtus mea, et *constituet* pedes meos in consummationem. (VET. LAT. Hab. 3, 19 (Verec. in cant. 6, 22))<sup>39)</sup>

(神である主は我が力であり、我が足を完全に堅固にするであろう。)  
*constituere* は次の(24)におけるごとく、目的語のみを伴い、「堅固にする」



の意味を表す動詞である。

(24) *tuarumque non tam facultatum, . . . quam consiliorum ad colligendas et constituendas reliquias nostras indigemus.* (CIC. Att. 4, 1, 3)<sup>40)</sup>

(私には、……あなたの資力よりむしろ、自分に残されたものを集め、堅固にするための、あなたの助言が必要である。)

また *Verecundus* は、(23) の引用に続けて、その解釈を述べるに際し、以下のごとく *constituere* を *solidare* (堅固にする) により言い換えている。<sup>41)</sup>

*Ipsum sibi uirtutem agnoscit, a quo mentis sanitatem percepit. Et a Deo perseuerantiae donum expectans, usque in consummationem pedes proprios solidari deprecatur.*

(自分がそこから精神の健全さを得た方が、自分にとって力であると認めている。そして神から忍耐の賜物を期待しつつ、自己の足が完全なまでに堅固にされるよう求めている。)

よって (23) の *constituere* を「堅固にする」の意味に取る——目的語の後ろの句から切り離せるものと見なす——ことは可能である。<sup>42)</sup>

従って、この *constituere* の原語である (12) の *τάσσειν* を「据える」の意味で——目的語の後ろの句から切り離せるものとして——捉え得ることがわかる。

なお LEH は、(12) において *τάσσειν* が目的語の後ろに伴う “*εἰς συντέλειαν*” に「終局まで? 完全に?» (“*to the end? perfectly?*”)<sup>43)</sup> という副詞句としての意味を与えており、よって (12) の *τάσσειν* をこの句から切り離せるものと見なしていると言える。

以上見たように、*Euthymius Zigabenus* が詩篇 17:34 の *καταρτίζειν* を目的語の後ろの部分から切り離せるものとして捉えていること、また (10) に見られるのと類似した表現が見出される (12) において、(10) の *καταρτίζειν* に対応する動詞の *τάσσειν* を目的語の後ろの句から切り離せるものと見なし得ることは、(10) の *καταρτίζειν* を「完成する」の意味に——目的語の後ろの部分から切り離せるものとして——解し得ることを示す。

実際この *καταρτίζειν* を、*C. G. Bretschneider* は「堅固にする、良い状態にする、強くする」 (“*constituo, in guten Stand setzen, firmo*”)<sup>44)</sup> の語義の下に、*Muraoka* は「さまざまな (または) 多数の構成要素を集めて作り出す」 (“*to put various or multiple components together and produce*”)<sup>45)</sup> の語義の下に挙げ

ており、よって共にそれを目的語の後ろの部分から切り離せるものとして捉えている。

故に、その訳語である(1)~(3)の *perficere* を「完成する」の意味で捉え得ることが明らかとなる。

これまでⅡ~Ⅴにおいて示されたことから、(1)~(3)の *perficere* を「…にする」と「完成する」の2通りの意味に取り得ることがわかる。

従って、PPs (prose) 17.32については、BTが指摘するように、*gedon*のみがラテン語原文の *perficere* に由来する——補語の *geræde* はラテン語原文に由来しない——という捉え方が可能である一方で、*gedon* も *geræde* も共にラテン語原文の *perficere* に由来する——ラテン語原文における「完成する」の意味が古英語訳において「用意させる、整ったものにする」の意味で表されている——という、BTの解釈とは異なる解釈も可能であると結論できる。

## 注

- 1) R. Weber, *Le Psautier Romain et les autres anciens Psautiers latins*, Collectanea Biblica Latina 10 (Roma, 1953). 古英語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、*DOE* (A. Cameron et al., *Dictionary of Old English: A to G on CD-ROM* (Toronto, 2008)) に従い、ラテン語のテキストのそれは、原則として、同辞典または *TLL* (*Thesaurus Linguae Latinae* (Leipzig, 1900-)) に従う。なお、頭に括弧付の番号を振った、古英語、ラテン語およびギリシャ語の引用文中のイタリック部分は、すべて筆者によるものである。
- 2) R. Weber et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, ed. quinta (Stuttgart, 2007).
- 3) E. Dekkers et I. Fraipont, *Sancti Aurelii Augustini Enarrationes in Psalmos I-L*, CCSL 38 (Turnholt, 1956), p. 99.
- 4) P. P. O'Neill (*King Alfred's Old English Prose Translation of the First Fifty Psalms* (Cambridge, Mass., 2001)) は Glossary (s.v. *geræde*) において、(4)の *geræde* を“ready”の語義と共に挙げている。
- 5) J. W. Bright and R. L. Ramsay, *Liber Psalmorum: The West-Saxon Psalms, Being the Prose Portion, or the 'First Fifty,' of the So-Called Paris Psalter* (Boston, 1907).
- 6) W. J. Sedgefield, *King Alfred's Old English Version of Boethius De Consolatione Philosophiae* (Oxford, 1899). (5)の *gedon* は BOETH. Cons.Phil.metr. 1.5.4 (L. Bieler, *Anicii Manlii Severini Boethii Philosophiae Consolatio*, CCSL 94 (Turnholt,

- 1984), p. 11) の “*legemque pati sidera cogis*” (星に法則を受け入れさせる) における *cogere* (強いる) に由来する。(5) は T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary: Supplement* (Oxford, 1921), s.v. *gedon* V の 「…にする、(或状態を) 引き起こす、(行為の結果として) 生じさせる」 (“*to make, bring about a state, condition, cause to be as the result of action*”) の (3)(a) において、名詞 (代名詞) および補語となる形容詞と共に用いられた例として挙げられている。
- 7) J. Bosworth and T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* (Oxford, 1898).
- 8) B. Thorpe, *Libri Psalmorum Versio Antiqua Latina; cum Paraphrasi Anglo-Saxonica* (Oxonii, 1835).
- 9) F. Granger, *Vitruvius: On Architecture, Books I–V*, repr. with corrections, LCL (Loeb Classical Library) 251 (1998), p. 82. (6) は *OLD* (P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary*, 2nd ed., 2 vols. (Oxford, 2012)), s.v. *perficio* 7 の 「(叙述語と共に) …にする」 (“(w. pred.) To render, make”) に挙げられている例である。
- 10) O’Neill (“The Old-English Prose Psalms of the Paris Psalter,” diss., U of Pennsylvania, 1980, p. 174) は (4) の *gedon* について “*gedyde*: Lat. *perficit* (Rom.), *perfecit* (Ga.)” と記し、BT と同じく、(4) において *gedon* のみがラテン語原文の *perficere* に由来すると見なす。なお *OED* (*The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. prepared by J. A. Simpson and E. S. C. Weiner, 20 vols. (Oxford, 1989), s.v. *irede*) は 「用意のできた」 (“Prepared, ready”) の語義の下に、(4) の前半を Thorpe のテキストから “He *gedyde* mine fet swa *geræde* [L. *perfecit pedes meos*] swa swa *heorotum*” のようにラテン語原文を挿入して引用している。この *OED* によるラテン語原文を含んだ引用が、BT が指摘するように、*gedon* のみが *perficere* に対応する——*geræde* に対応する語はラテン語原文にはない——と考えられることを示す意図のものか、それとも筆者が本稿で明らかにしようとするように、*gedon* も *geræde* も共に *perficere* に由来すると考えられることを示す意図のものかは不明である。
- 11) それぞれのテキストは以下の通りである。A = *The Vespasian Psalter*, S. M. Kuhn (Ann Arbor, 1965); B = *Der altenglische Junius-Psalter*, E. Brenner, AF 23 (Heidelberg, 1908; Nachdr. Amsterdam, 1973); C = *Der Cambridger Psalter*, K. Wildhagen, Bib. ags. Prosa 7 (Hamburg, 1910; Nachdr. Darmstadt, 1964); D = *Der altenglische Regius-Psalter*, F. Roeder, Studien zur englischen Philologie 18 (Halle, 1904; Nachdr. Tübingen, 1973); E = *Eadwine’s Canterbury Psalter*, F. Harsley, EETS 92 (London, 1889); F = *The Stowe Psalter*, A. C. Kimmens, (Toronto, 1979); G = *The Vitellius Psalter*, J. L. Rosier, (Ithaca, NY, 1962); H = *The Tiberius Psalter*, A. P. Campbell, Ottawa Mediaeval Texts and Studies 2 (Ottawa, 1974); I = *Der Lambeth-Psalter*, U. Lindelöf, Acta Societatis Scientiarum Fennicae 35, 1 (Helsingfors, 1909); J = *Der altenglische Arundel-Psalter*, G. Oess, AF 30

- (Heidelberg, 1910; Nachdr. Amsterdam, 1968); K = *The Salisbury Psalter*, C. Sisam and K. Sisam, EETS 242 (London, 1959).
- 12) DOE (s.vv. *gefremman*, *gefremian* 6) は (7) を、「ここでは『或物を何か他の物のようにする』を意味する *perficere ... tamquam* への注解としての *gefremman ... swa swa*」(“*gefremman ... swa swa*, glossing *perficere ... tamquam*, here in the sense ‘to make, cause (something) to be or become like (something else)’”) の記述の下にラテン語原文と共に引用し、“ABGHJK *gefremede*, F *gefremode*, D *gefremed*, EI forms of *fullfremman*” と付記して他の7の詩篇行間注解の対応箇所においても *perficere* が *gefremman* に訳されていることを示す。
- 13) Lindelöf は I のテキストの Glossar (s.v. *gedon*) において、*gedon* の原語として *perficere* を挙げている。
- 14) B. Assmann, *Angelsächsische Homilien und Heiligenleben*, Bib. ags. Prosa 3 (Kassel, 1889; Nachdr. Darmstadt, 1964), p. 155. (9) は DOE, s.vv. *gefremman*, *gefremian* 3.b の「補語と共に：(或人または或物を) 或状態にする」(“with a complement: to render / make (someone / something) in a certain state / condition”) の i において、補語の形容詞と共に用いられた例として挙げられている。
- 15) A. Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens*, rev. par H. Chirat (Turnhout, 1954), s.v. *perficio* 2.
- 16) M. Mlčoch, *Psalmi Latinae Vulgatae* (Regensburg, 1900), p. 45.
- 17) J. Ecker, *Porta Sion: Lexikon zum lateinischen Psalter* (Trier, 1903), s.v. *cervus* 1.a.
- 18) A. Rahlfs, *Septuaginta*, ed. altera (Stuttgart, 2006). LXX の書の略記は、H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, rev. by H. S. Jones, with a revised supplement (Oxford, 1996) による。
- 19) ヘブライ語原文で (10)~(12) に対応する箇所 (詩篇 18:34, サムエル記下 22:34, ハバクク書 3:19) は F. Brown, S. R. Driver, and C. A. Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* (Oxford), s.v. אֵילָה において関連付けられている。すなわちそこでは、直喩で用いられた אֵילָה (雌鹿) の例として詩篇 18:34 の [מְשֹׁה רַגְלֵי כְּאֵילָה] (彼は我が足を雌鹿のようにする) が引用され、この箇所とサムエル記下 22:34 が = で結ばれ、さらに「参照」(“cf.”) としてハバクク書 3:19 の [כַּאֲשֶׁר רַגְלֵי כְּאֵילָה] (彼は [我が] 足を雌鹿のようにした) が「すなわち足元の確かな、しっかりした」(“i.e. surefooted, secure”) という解釈と共に引用されている。
- 20) T. E. Bird (*A Commentary on the Psalms*, vol. 1 (London, 1927), p. 173) は (2) の “Qui perfecit” に関して “The LXX Ps. ὁ καταρτιζόμενος: 2 K. τιθεῖς” と記し、(10) の καταρτιζειν と (11) の τιθέναι を関連付けている。
- 21) (13) は T. Muraoka, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint* (Louvain, 2009),

- s.v. τίθημι I.3 の「…にする」(“*to cause to be, render*”) の *c* において、ὥς または ὡσεὶ を伴う例として挙げられている。
- 22) (14) は Muraoka, s.v. τάσσω 3 の「…にする」(“*to cause to become*”) において、対格と εἰς を伴う例として挙げられている。
- 23) M. Adriaen, “*Commentarii in Prophetas Minores*,” *S. Hieronymi Presbyteri Opera*, pars 1, 6, CCSL 76A (Turnholti, 1970), p. 652.
- 24) (16) は Blaise, s.v. pono 6 の「…にする」(“*faire, rendre*”) において、*in* と対格と共に用いられた例として挙げられている。
- 25) R. Demeulenaere, “*Commentarii super Cantica Ecclesiastica*,” *Verecundi Iuncensis Opera*, CCSL 93 (Turnholti, 1976), p. 147.
- 26) (18) は Ecker, s.v. pono 6.c の「…のようになる＝同じにする」(“*machen wie = gleichmachen*”) に挙げられている例である。
- 27) D. R. S. Bailey, *Cicero: Letters to Friends*, vol. 1, LCL 205 (2001), p. 134. (19) は *OLD*, s.v. *perficio* 1c の「建てる、建設する、作ることなどを終える」(“*to finish building, constructing, composing, etc.*”) に挙げられている例である。
- 28) *DOE* (s.vv. *fullfremman*, *fullfremian* 6) は (8) の前半を、「ここでは『或物を何か他の物のようにする』を意味する *perficere ... tamquam* への注解としての *fullfremman ... swaswa* (“*fullfremman ... swaswa, glossing perficere ... tamquam, here in the sense ‘to make, cause (something) to be or become like (something else)’*”) の記述の下にラテン語原文と共に引用し、“*E se fulfremmed, ABCDFGHJK forms of gefremman / gefremian*” と付記して、E の対応箇所でも *fullfremman* が、その他の 9 の詩篇行間注解の対応箇所では *gefremman* または *gefremian* が、*perficere* の訳語として見出されることを示す。なお *DOE* は、この詩篇行間注解についての付記に加えて“PPs[prose] *gedyde*”を挙げており、よって BT と同じく、(4) において *gedon* のみが *perficere* に由来すると見なしていることがわかる。
- 29) H. Hecht, *Bischof Wærferths von Worcester Übersetzung der Dialoge Gregors des Grossen*, Bib. ags. Prosa 5, 1. Abt. (Leipzig, 1900; Nachdr. Darmstadt, 1965). (20) の *fullfremman* は *GREG.MAG. Dial. 2.11.2 (A. de Vogüé, Grégoire le Grand: Dialogues, t. 2, Schr 260 (Paris, 1979), p. 174)* の “*ut ipse quoque parietem cum fratribus perficeret*” (彼も修道士たちと壁を仕上げるようにと) における *perficere* に由来する。(20) は *DOE*, s.vv. *fullfremman*, *fullfremian* 1.b の「(建設ないしは創造されている物を(対格)建てる、または形作るのを終える」(“*to finish building / forming (something being constructed or created acc.)*”) にラテン語原文と共に挙げられている例である。
- 30) 本稿における生没年は R. Gryson, *Répertoire Général des Auteurs Ecclésiastiques Latins de l'Antiquité et du Haut Moyen Âge*, 2 vol. (Freiburg im

- Breisgau, 2007) または T. Wittstruck, *The Book of Psalms: An Annotated Bibliography*, vol. 1 (New York, 1994) による。
- 31) Demeulenaere, p. 105.
- 32) Verecundus によるこのダニエル書3:40の引用は、*TLL* (s.v. *perficio* IB1bβ) の「キリスト教の用法で、敬虔な生活を送り永遠に生きられるように変えられるべき信徒が、神の助けにより完全にされる」(“*usu christiano -untur fideles dei auxilioita permutandi, ut vitam sanctam agant et vivant in aeternum*”) の記述の下に例示されている (vol. 10, pt. 1, p. 1371, 39–40)。
- 33) J.-P. Migne, “*Explanatio in omnes psalmos,*” *Haymonis Halberstatensis Episcopi Opera Omnia*, PL 116 (Turnholti), col. 251C.
- 34) A. Bardani (*Psalterium Davidicum Syntactica Paraphrasi* . . . ed. altera (Romae, 1830), p. 45) も (2) の *perficere* を以下のごとく、目的語の後ろの部分から切り離せるものと見なしている——“*Deus noster est, qui perfecit pedes meos, ut essent fortes, et veloces tamquam pedes cervorum quoties ex aliquo periculo evadendum erat*” (我が足を (何らかの危険から逃げねばならなかったたびごとに) 雄鹿の (足) のように (強く、また速くなるようにと) 完全にした (のは我らの神である))。
- 35) 今義博他訳『アウグスティヌス著作集』第18巻I (教文館、1997年)、172頁。
- 36) (21) は LEH (J. Lust, E. Eynikel, and K. Hauspie, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint*, rev. ed. (Stuttgart, 2003)), s.v. *καταρτίζω* において、中間態の「(或物を完全に) 仕上げる」(“*to finish (completely)* [τ1]”) の語義の例として挙げられている。
- 37) J.-P. Migne, “*Euthymii Commentarius in Psalmos Davidis,*” *Euthymii Zigabeni Opera Quae Reperiri Potuerunt Omnia*, t. primus, PG 128 (1864), col. 241C. この引用に付されたラテン文である“*Qui perfecit pedes meos quasi cervi. Perfecit, hoc est praeparat vel perfectos facit ad cursum, in tempore scilicet fugae* (col. 242C)” (「彼は我が足を雄鹿の [足] のように完全にした。」好機 (すなわち逃亡の) に走るように、彼は完全に、すなわち整える、ないしは完全なものにする) における *praeparare* (用意する) から、意味不明の“*Ἐντρεπίζων*” は“*Εὐτρεπίζων*” (彼は用意する) の誤記と考えられる。
- 38) (22) は LEH, s.v. *τάσσω* において、能動態の「(或人を) 配置する」(“*to station* [τ1α]”) の語義の例として挙げられている。
- 39) Demeulenaere, p. 147.
- 40) D. R. S. Bailey, *Cicero: Letters to Atticus*, vol. 1, LCL 7 (1999), p. 284. (24) は *TLL*, s.v. *constituo* IIB3 の『『堅固にする』と同じ、強くする、固める、など』 (“*i. q. stabilire, roborare, firmare, sim.*”) に挙げられている例である (vol. 4, p. 517, 38–39)。

- 41) Beda Venerabilis (735 没) は、(23) におけると同じく *constituere* が用いられたハバクク書 3:19 の引用——“... ET CONSTITVET PEDES MEOS IN CONSVMMATIONEM, ... (J. E. Hudson, “In Habacuc,” *Beda Venerabilis Opera*, pars 2, 2B, CCSL 119B (Turnholti, 1983), p. 407)”——について “*Ipse gressus operum meorum ad consummationem firmi finis perducere ualet*” (彼は我が行いの歩みを、堅固な終局の完全さへと導くことができる) のように *firmus* (堅固な) を用いて解釈を述べており、*Verecundus* が問題の *constituere* を「堅固にする」の意味の語で言い換えているのと類似した捉え方をここに見ることができる。
- 42) S. Connolly (*Bede: On Tobit and on the Canticle of Habakkuk* (Dublin, 1997), p. 94) は、Beda が引用するハバクク書 3:19 を “... will both perfectly strengthen my feet ...” (……我が足を完全に強くするであろうのみならず……) と訳しており、問題の *constituere* を「強くする」の意味で——目的語の後ろの句から切り離せるものとして——捉えている。
- 43) LEH, s.v. συντέλεια.
- 44) C. G. Bretschneider, *Lexicon Manuale Graeco-Latinum in Libros Novi Testamenti*, ed. tertia (Lipsiae, 1840), s.v. καταρτίζω 2.
- 45) Muraoka, s.v. καταρτίζω 1.

## On the Old English Equivalents of *perficere* in Ps. 17:34

Satoru ISHIHARA

J. Bosworth and T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* (BT, s.v. *geræde*) cites *He gedyde mine fet swa geræde swa swa heorotum* (PPs (prose) 17.32) “He made my feet as ready as harts” along with the Latin original *qui perfecit pedes meos [celeris] tanquam cervi* “who made my feet [swift] like a hart’s [feet]”; what is noteworthy about this Latin citation is that the complement *celeris* “swift” is supplied after the object in square brackets by BT. Here the *perficere*, which is followed by the object with the complement, means “to make, render.” Concerning these citations, therefore, it is to be said that BT regards the *gedon* “to make, render” alone as derived from the *perficere*, and that it regards the *geræde* “ready” as underived from the Latin original.

The *perficere* in *qui perfecit pedes meos tamquam cervorum* (VVLG. psalm. 17, 34) “who made—or perfected—my feet like harts’ [feet]” is rendered by *gedon* in *se gedede l se ðe fulfremed fet mine swaswa heorta* (PsGll 17.34), which shows that the *perficere* can be interpreted as “to make, render.”

On the other hand, in his exposition of *Qui perfecit pedes meos tamquam cervi* (VET. LAT. psalm. 17, 34 (Aug. *ad l.*)), Augustine deals the *perficere* separately from the part following the object, placing an adverbial phrase after the object: *Qui perfecit amorem meum, ad transcendenda spinosa et umbrosa implicamenta huius saeculi* “Who perfected my love in order to climb over the thorny and shadowy entanglements of this world.” This fact clarifies that the *perficere* in Ps. 17:34 can be understood in the sense of “to perfect.”

Thus the *perficere* in Ps. 17:34 can be taken in both the senses: “to make, render” and “to perfect.” Concerning PPs (prose) 17.32 and the Latin original, therefore, we can regard not only the *gedon* alone but also both the *gedon* and the *geræde* as derived from the *perficere*.